



第115回

バレー「新ルール」で何が変わるのか

※2025年7月の毎日新聞ニュースサイト記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

今年、バレーボールの国際大会でルールが試験的に変更され、戦術やプレーに与える影響に注目が集まっている。どのような事態が想定されるのか。専門家や選手への取材から読み説いた。

レシーブが乱れた後、高いトスが上げると、突然、反則を告げる笛が鳴る――。

バレーファンにとって理解しにくいルールの筆頭が「ダブルコンタクト」だった。

バレーは原則、同じ選手が連続でボールを触ってはいけない。ダブルコンタクトは、トスのオーバーハンドパスの際に左右の手がボールに触れるタイミングがずれるなどした場合に取られる反則だ。

日本バレーボール連盟(JVA)

の審判規則委員会で主事を務める服部篤史さんは「僕ら審判でも、テレビで見ると(審判台から見ると)より距離があるので、分かりにくい反則」と率直に語る。

ダブルコンタクトのルールが試験的に変わったのは、6月に始まった、男女の世界トップ16カ国・地域が参加するネーションズリーグ(VNL)の1次リーグから。自コート内にトスを上げる場合、左右の手とボールの接触にばらつきが生じて、連続したスムーズな動きで「一連の動作」と認められる場合は反則を取られなくなった。

服部さんは変更の理由を語る。

「そもそも、ダブルコンタクトとなれば(思い通の場所に上げるの

が難しく、良いトスでないので、反則を取らなくても相手チームに不利益はない。ラリーがより継続し、分かりやすくなった」

男子日本代表のあるセッターも歓迎する。「ダブルコンタクトの反則を取られると、セッターはメンタル的に追い込まれる。(ルール変更で) プレッシャーがなくなり、思い切ってプレーできる」
今年から正式に変わったルールもある。

サーブ権を得ると、6人の選手の位置が時計周りに一つ回っていく「ローテーション」に関連するものだ。

これまでのルールでは、サーブ時に、両チームの選手はローテーションに基づいて前後左右の選手と正しい位置関係を守っていなければ、「ポジション」の反則を取られた。

それが、ローテーションの制約を受けず、コート内のどこにいても問題なくなった。

変更の背景について、服部さん

は「『スクリーン』というスポーツマンシップに反する行為をやめさせるため」と説明する。

スクリーンとは、サーブを打つ瞬間やボールの軌道を相手チームに見えないように妨害するもので、これまでも反則と明記されていた。

従来からのルールでは、サーブを打ってから、ボールが相手コートに届くまでの間に、得意なポジションへと入れ替わる必要があった。自然と前衛の選手たちはネット際に並ぶため、意図的なスクリーンとの見分けが難しかった。

今回の変更により、サーブ権を持つチームの選手たちが、サーブを打ってから動く必要性がなくなる。「季下に冠を正さず」で、スクリーンと疑われるような行為ができなくなった。

また、ルール変更ではないが、大会ごとの規則となるビデオ判定の「チャレンジ」にも新たな動きがある。

これまではフリー中に相手チームの反則を見つけた場合、即座に

チャレンジの要求をする必要があった。

しかし、今年のVNLと世界選手権ではラリー後でも認められる。機材の進化により、一定時間を経過しても映像から該当するプレーを瞬時に特定し、検証することが可能になったためだ。

VLNの日本代表戦では、相手チームにスパイクを決められた後に日本側が要求した「床にボールが落ちた」とのチャレンジが成功し、日本の得点に変わったことがあった。

バレーはオリンピックの4年サイクルでルールが固まっていく。今年、試験的に行われるルール変更が、そのまま採用されとは限らない。ルールが変われば、戦術やトレンドも変わる可能性がある。3年後のロサンゼルス五輪へ向け、どのような流れになっていくか注目だ。